

東医体の夏 — 体育会系医学生の追憶 —

平成 26 年 9 月
沼尾 利郎



写真 1

1 東医体とは

多くの人にとって、「夏の思い出 ≒ 夏休みの思い出」ということになるでしょう。大人になった今でも、少年時代に経験した夏休みのエピソードや、学生時代に過ごした夏合宿の日々などは、楽しくもほろ苦い記憶として毎年この時期に思い出されます。体育会系医学生であった私にとって、夏と言えば東医体（とういたい）のことでした。東医体とは、東日本（甲信越地方以东）の医学部が参加する東日本医科学生総合体育大会のことであり、西日本医科学生総合体育大会（西医体）とともに、わが国の医科学生の大半が参加するスポーツの一大祭典です。「医学部の体育大会」というと小規模なものをイメージするかもしれませんが、東医体は東日本の医学部から合計 36 校 15,000 人以上の学生が集まり、国内で行われる体育大会としては国民体育大会（国体）、西医体に次ぐ第 3 位の規模となっています。競技は夏季・冬季合わせて 23 種目あり、ほとんどの競技は夏に行われますが、スキーとアイスホッケーだけは冬に開催されます。医学部の体育会にとって、東医体や西医体はもっとも重

要な大会であるばかりでなく、他大学の学生と知り合える貴重な交流の場でもあります。東医体直前の夏合宿や先輩・後輩たちと過ごした濃密な日々が、卒後 30 年以上も経った現在でも鮮やかによみがえってくるのです。

2 講道館合宿

私は大学に入ってから柔道を始めました。浪人をしていたので「何でもいいから体を動かしたい」と思っていたのですが、団体競技でありながら個人戦もあり、体力と技術力の両方が求められる武道として、柔道を選んだのです。「柔よく剛を制す」とは言うものの、基本的な体力や技の切れがなければ相手に勝つことはできません。初心者の私が柔道経験者の部員と対等に組み合えるはずもなく、入部当初は基礎体力の違いを実感して、投げられるばかりの日々でした。強くなりたい一心で練習はよくやりましたが、ある年の夏は大変なことになりました。柔道部の師範（当時七段、現在九段）にうまくだまされて（笑）、「午前中は警視庁武道館、午後は講道館」という、とんでもない合宿をやることになったのです。筋肉の塊のような大男ぞろいの機動隊員や全日本クラスの有名選手がひしめきあう中で、ただひたすら投げられ・抑えられ・絞められ続けた合宿でしたが、おかげでどんな強暴そうな（？）大男に対しても物怖じ^{ものお}だけはしなくなりました。厳しい練習の合間に講道館の窓越しに見えた真夏の雲が、今も鮮明に思い出されます（写真1）。

夏が来れば思い出す 流れる汗 講道館

合宿で鍛えられた気力・体力や少しばかりの自信とは裏腹に、東医体の結果は満足できるものではありませんでした。「やるだけやったのだから…」という自己肯定感の一方で、「もっとがんばれたのに…」という悔しさが入り混じった複雑な気持ちでした。東医体という祭りの後の寂しさが、私を「東医体の終り＝夏の終り＝青春の終り」のような気分させ、真っ赤な夕焼けやセミの声とともに東医体の夏は過ぎていったのです。気が付けばいつの間にか、いわし雲が流れる秋の空になっていました（写真2）



写真 2

3 夏の終り

「夏の終り」といえば、伊東静雄の同名の詩が思い浮かびます。

夜来の颱風にひとりはぐれた白い雲が

気のとほくなるほど澄みに澄んだ

かぐはしい大気のをながれてゆく

(中略)

…さよなら…さやうなら…

…さよなら…さやうなら…

ずっとこの会釈をつづけながら

やがて優しくわが視野から遠ざかる

昭和 21 年 8 月に書かれたこの詩は、浪漫派の詩人である伊東静雄の代表作であり、優れた抒情詩として教科書にも載っています。発表当時の時代背景から、敗戦直後の虚脱感や喪失感の中での様々な別れや時の移ろいを行間に漂わせつつ、去りゆく夏の寂寥感を白いはぐれ雲に託して詩情豊かに表現しています。「…さよなら…さやうなら…」というリフレインが何とも

印象的で、今でも好きな詩の1つです。

今年の夏は久しぶりに東医体に顔を出して、後輩たちを応援しました。若者のひたむきな姿を見ると、若い頃の自分にも出会うことができます。運動部であれ文化部であれ、学生にとって勉強と部活の両立は大変ですが、どちらも手を抜かずに全力で打ち込んで欲しいものです。

「部活でがんばれない者は卒試（卒業試験）や国試（国家試験）でもがんばれないし、社会に出てからもがんばれない」。東医体OBの1人として、私はそう考えます。